

第5節 縄文人は「なぜ」そこに住んだか

－ GIS空間分析から －

国際日本文化研究センター 宇野 隆夫

1. はじめに

みなさまこんにちは、宇野でございます。

今日は一時間余り、「縄文人はなぜそこに住んだのか」ということでお話をさせていただきます。

この矢張下島遺跡を拝見させていただき、第一印象が2つあります。ひとつはこの利賀の地に、なぜ5,000年以上の間、縄文の人達が生活したのか。逆に弥生時代に入りますと、なぜ長らくその地に人が住まなかったのか。その違いを知りたいということです。

もうひとつ感じたことは矢張下島遺跡を拝見したときに、ここが縄文時代の広域交流の場所ではなかったかということです。ここで見つかっておりますものに蛇紋岩・下呂石・黒曜石という三種類の石でできた石器があります。蛇紋岩はおそらく富山県の海岸地帯、下呂石はいうまでもなく岐阜県から、黒曜石は信濃方面から来ています。これらの地域の組合わせからは、ブリ街道が想起されます。

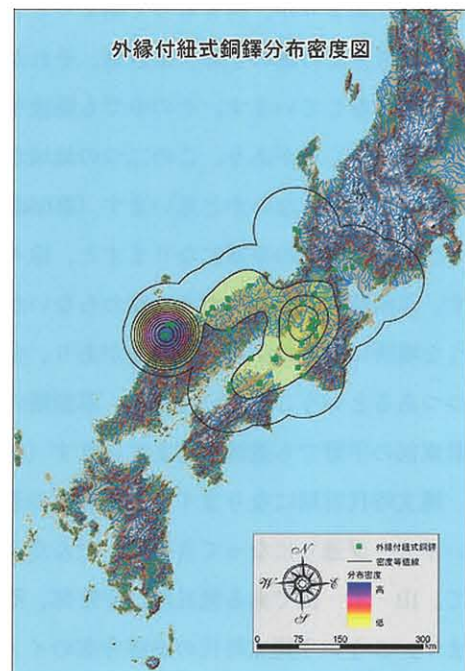
2. GISによる分析方法

これらを想像上で終わらせずに何らかの形で表したいということで、GISを使った分析をしてみます。GISというのは空間情報をコンピューターで分析するものです。考古学はまず、時間の序列を明らかにしますが、これに空間情報を加えて研究する方法がGISを使った分析です。

第65図は紀元前1～2世紀頃の銅鐸の分布図です。分布の有無だけではなく、ひとつの場所、たくさん重なっている場所などが、GISを使うとわかり易い、ということが一つのメリットです。

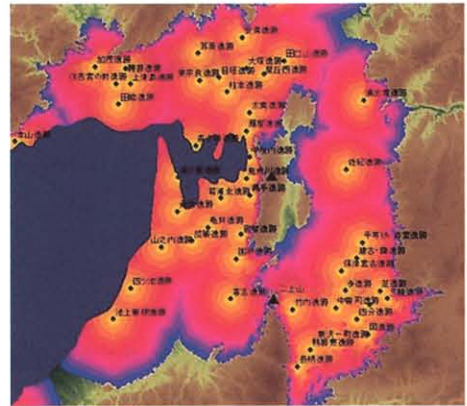
その中のひとつの銅鐸ですが、兵庫県桜ヶ丘銅鐸が出土した地点からどういう場所が見えたのかを示しました。こういったこともGISを使うと、簡単にできます。

もちろん季節によって木々の葉が茂ったり落ちたりといったような事から、視野が広くなったり狭くなったり、また地球は丸いので曲率も考えないといけませんので、この範囲が完全に見えたかどうかは色々調べなくてははいけません。しかし、眺望が開けたところであるのか、それとも非常に狭い、外から見えないところに銅鐸を埋納したのかということ、考えることができます。



第65図 紀元前1～2世紀の銅鐸分布図

第66図は、大阪湾を中心とした弥生時代の遺跡分布です。当時は河内潟が広がっていたので、これも復元しています。弥生時代の紀元前後を中心とする時代に、同時に営まれた集落から歩いてどれくらいの時間がかかるかということを等高線で示したものです。集落と集落との時間の等高線が交わるところで、落ち合うことができるということです。GISの基礎となる三次元の地図には、地形の傾斜という情報が含まれているので、このようなことを計算することができます。こういったGISの分析から私が関心を持っている、縄文時代の物流ネットワークについて考えていきます。



第66図 大阪湾を中心とした弥生遺跡分布図

3. 富山県の縄文遺跡の時期ごとの分布

第67図は、富山県の縄文時代の遺跡分布図です。富山県には1,432の遺跡があります。これを見るとやはり富山は縄文王国だなと感じます。富山県に縄文文化が栄えたのは、山・里・海という、いろんな資源がバランス良くある土地柄だからでしょう。

遺跡の配置が時間の推移とともにどのように変わったのかということをお話したいと思います。この時間の推移は、細かくすればきりがありませんが、ここでは草創期・早期・前期・中期・後期・晩期という6つの区分に分けます。

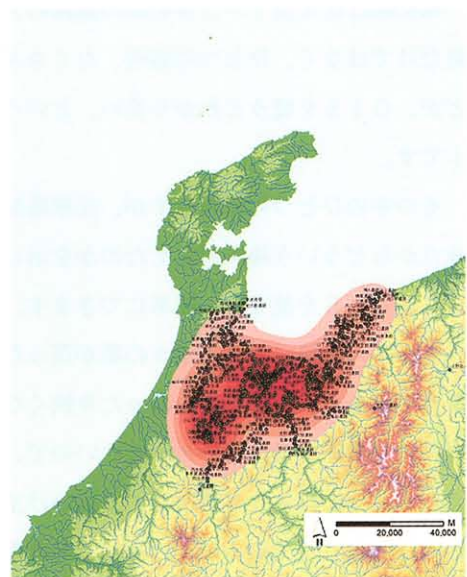
縄文時代が始まったのは、私が学生の時には約12,000年前と習いましたが、現代では放射性炭素年代の結果などから約14,000年前が始まりとする説もあります。

縄文時代始まりが、何をもって始まりとするのかということは色々と議論されておりますが、縄文草創期では、砺波平野の奥の立野ヶ原台地、それから小矢部周辺、呉羽丘陵、射水丘陵、富山平野の奥にかけての所に主に分布しています。その中でも砺波平野の奥と富山平野の奥に二大中心地があり、この二つの地域が富山の縄文文化の首都になるのではないかと思います（第68図）。

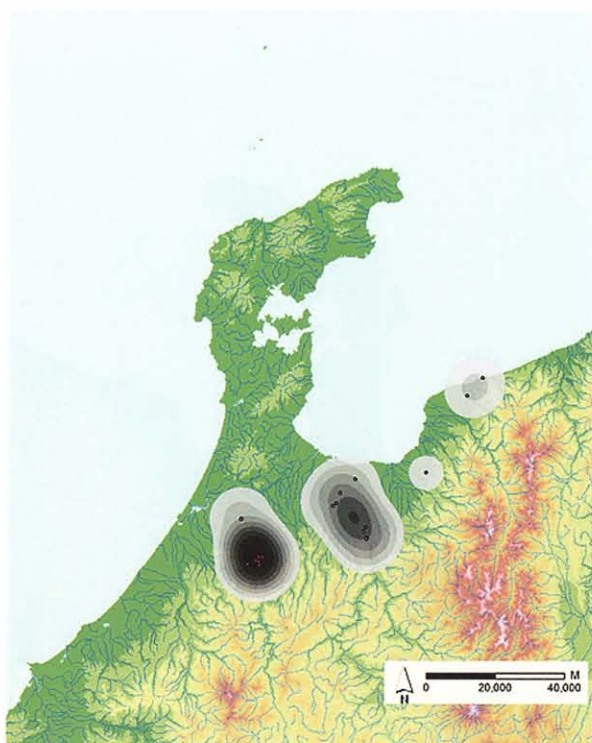
次に縄文時代の早期になりますと、徐々に遺跡が増えてきます。草創期とそれほど大きく変わらないが、矢張下島遺跡のような場所に遺跡が出現することがあり、全般的に遺跡が広がりつつあるということがいえます。草創期の二大中心地に加えて、県東部の平野でも遺跡が増えていきます（第69図）。

縄文時代前期になりますと、富山県の遺跡の分布は、だいたいイメージ通りになってきます。だんだんと遺跡が増えていて、山・里・山である低丘陵、平野部、海辺などに広く分布します。こういう縄文時代の遺跡分布のイメージと実態が重なってくるのが、縄文時代前期頃であると考えられます（第70図）。

縄文時代中期は、縄文王国が一番繁栄した時期といいますが、



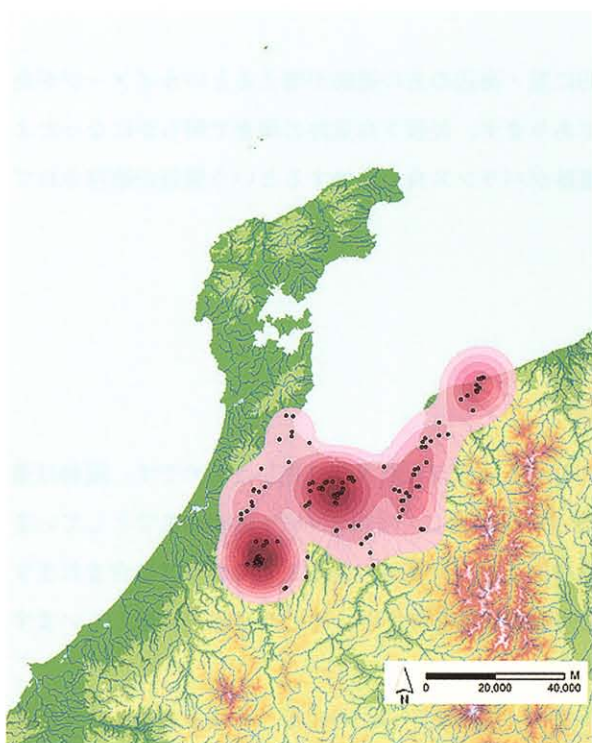
第67図 富山県の縄文遺跡分布図



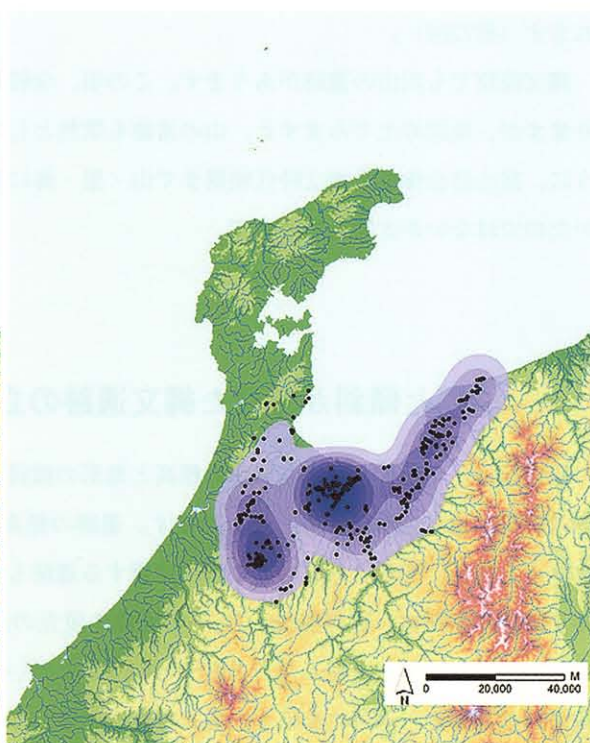
第68図 富山県の縄文時代草創期の遺跡分布図



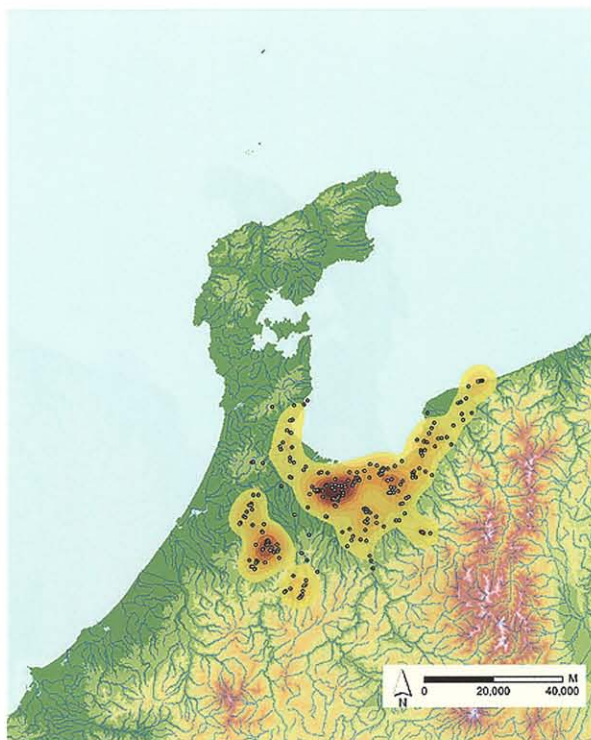
第69図 富山県の縄文時代早期の遺跡分布図



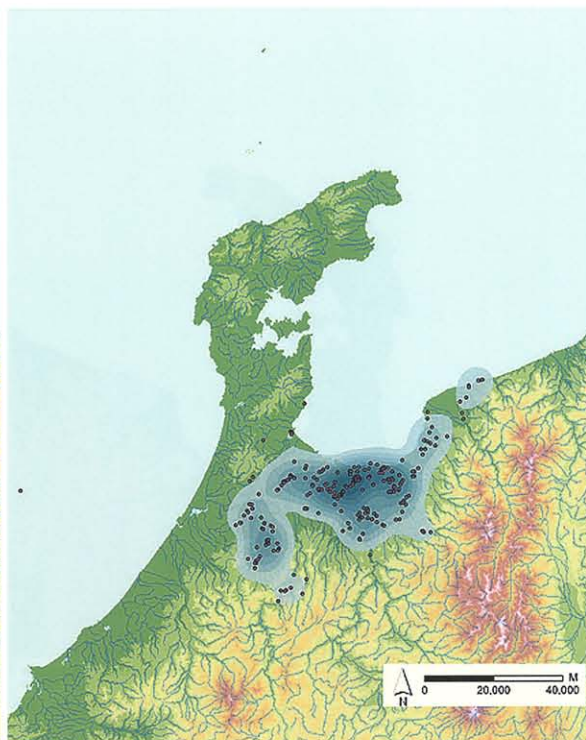
第70図 富山県の縄文時代前期の遺跡分布図



第71図 富山県の縄文時代中期の遺跡分布図



第72図 富山県の縄文時代後期の遺跡分布図



第73図 富山県の縄文時代晩期の遺跡分布図

最も多く遺跡がある時期です。二大中心地が依然としてあると同時に、遺跡が広く密に分布しています（第71図）。

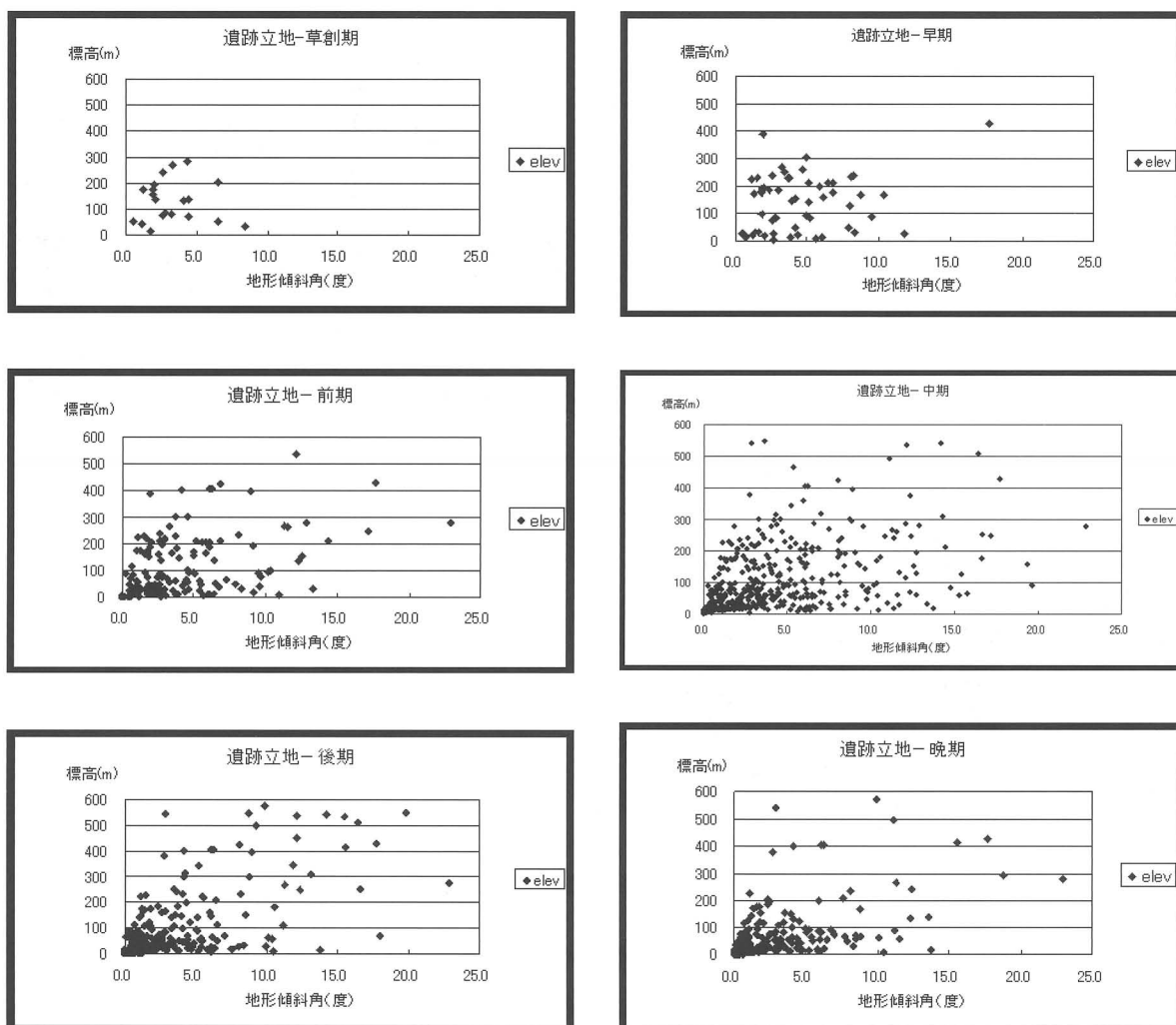
縄文時代後期は、中期と部分的には違いがありますが、遺跡分布にはそれほど変わりはないものと考えられます（第72図）。

縄文晩期でも沢山の遺跡があります。この頃、全般的に里・海辺の方の遺跡が増えるというイメージがありますが、地図の上でみますと、山の遺跡も依然としてあります。矢張下島遺跡の調査で明らかになったように、富山県全体では縄文時代晩期まで山・里・海に遺跡がバランス良く立地するという構造が維持されていたのではないかと考えています。

4. 標高と傾斜から見た縄文遺跡の立地

第74図は、今のデータから遺跡の標高と地形の傾斜のデータを取得したグラフ化したものです。縦軸は遺跡の標高、横軸は傾斜を表したものです。遺跡の標高はグラフが見にくくなるので、600mまでとしています。もちろん、それより高いところに位置する遺跡もありますが、大多数の遺跡がこのグラフに含まれます。縄文時代草創期は、標高300mぐらいの台地や段丘の比較的平らな場所を中心として遺跡が立地しています。そういう場所を選んで住んだであろうということがいえます。

縄文時代前期から中期になると、色んな場所に住んでいます。低くて平らな所にも、もちろんたくさん住んでいるのですが、高くて平らな所、高くて傾斜が急な所、低くて傾斜が急な所など、いろいろな場所に縄文人は住んでいます。



第74図 時期別の縄文遺跡立地図

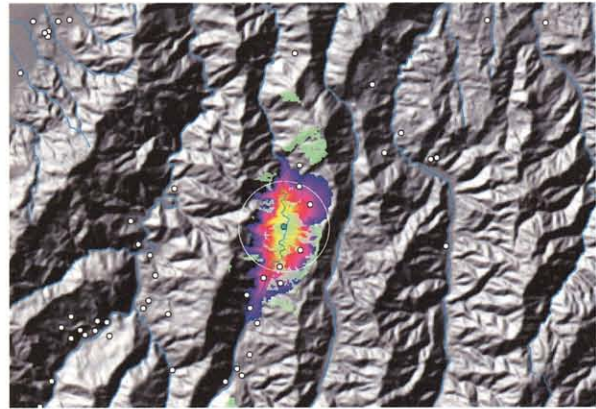
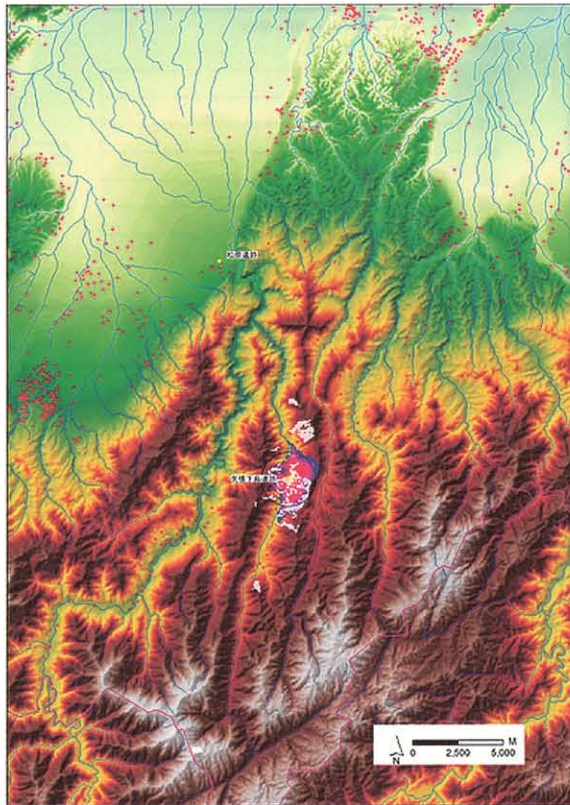
縄文時代の後期から晩期では、標高の低いところに遺跡が多い事は確かですが、縄文時代晩期でも高い所や傾斜が急な所に遺跡が立地することは、そこがいろんな資源を得られる所だからということであったと思います。

山の中でも比較的平らな場所、崖崩れでできたような緩やかな平地、傾斜が急な場所でも緩やかな場所などは、後の時代の人はあまり使いません。このような場所でも縄文人は、少なくとも縄文時代前期から晩期にかけて、その場所の良さをよく知っていて利用していたのでしょう。

5. 縄文時代の遺跡からの眺望

第75図は、矢張下島遺跡周辺の地形図に眺望範囲と1時間で歩ける範囲を示したものです。矢張下島遺跡は、利賀川の河岸段丘が比較的に広い場所の中で、標高420mとかなり低く、川に近接しています。そういう場所に矢張下島遺跡があります。

当時の森がどのようなであったかということは、遺跡のデータから復元しなくてはいけないのですが、一



(拡大図)

第75図 矢張下島遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲

一般的には、富山県の緯度で標高420mですと、照葉樹林帯と広葉落葉樹林帯が交錯して樹層が非常に豊かな場所です。そして谷側に近づけば近づくほど、河畔林があって森林資源が多様化していきます。

この場所から、1時間で行ける範囲は非常に狭く、これは地形の傾斜が急な場所であるからです。図面では示している1時間で歩いて行ける範囲は、現代人を基準にしています。縄文人と現代人とどちらが体力があるかという難しい問題もありますが、おおよそ平均的に1時間で歩ける範囲を示しています。

また矢張下島遺跡を中心に半径1.5kmの範囲を示していますが、これが1時間で歩ける範囲とほぼ重なります。1.5kmというのは民族考古学による狩猟採集民の研究で、人の動きや動物の動きを見ることができる範囲です。

いろいろな遺跡を比較しなければいけないのですが、矢張下島遺跡が立地する場所は、この谷の資源を最大限に利用する上で、非常に良い場所であったのではないのでしょうか。このことに、縄文時代の早期から晩期への長きにわたって、この場所にこだわった理由の1つがあると思います。

6. 縄文遺跡からの眺望の連鎖

矢張下島遺跡からみえる範囲に遺跡があるかどうか、そしてその見えている場所にある遺跡から更に、どういう空間が見えるのか、そういう範囲を見えることの連鎖と考えています。

この矢張下島遺跡の北側には、北豆谷遺跡という遺跡があります。次に、庄川と利賀川との合流地点の比較的低い標高300mの場所に仙納原遺跡があります。これら細い谷にあって眺望範囲は狭いのですが、矢張

下島遺跡と北豆谷遺跡と仙納原遺跡から見える範囲を重ねてみると、すべて重なりました。ということは遠くからこの集落を見ながら来て、次の集落はどこにあるかということを知った場合に、あそこに見える、あるいはあそこまで行ったら次の集落が見えるという説明ができたということです。そういう場所に遺跡が立地していたと考えています。

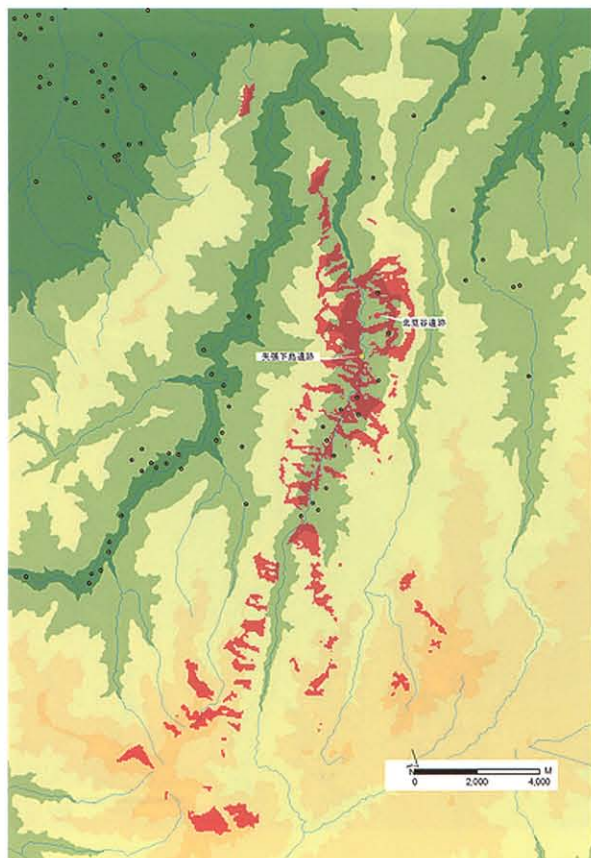
さらに平野に出ると、砺波市松原遺跡があります。ここではいっしょに見晴らしが開け、越中国府から岩崎鼻の海岸部まで見えます。海は直接見えません。山については谷口の遺跡は見えるが谷奥の遺跡は見えません。砺波平野の西側は、非常に良く見えます。

松原遺跡は平野に立地するため、1時間で歩ける範囲はかなり広がります。そしてこの範囲の中には遺跡がほとんどありません。その範囲の外側には遺跡がたくさんあります。もしかしたら、この1時間で歩ける範囲が松原遺跡の主要な活動地域であった可能性があるのではないのでしょうか。

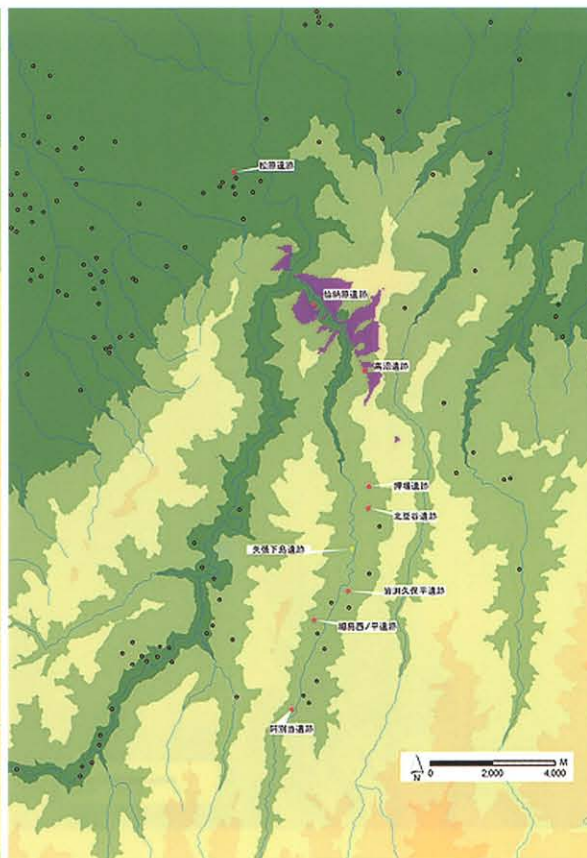
山の中の遺跡から里・平野に下りると、見晴らしや歩ける範囲が違う空間に出ますが、それは矢張下島遺跡から繋がっていたものです。

松原遺跡から西側を見ますと、蓮沼清水遺跡が見えます。蓮沼清水遺跡から逆に東側の砺波平野が一望できます。また、北東側の越中国府関連遺跡からは海まで見えます。

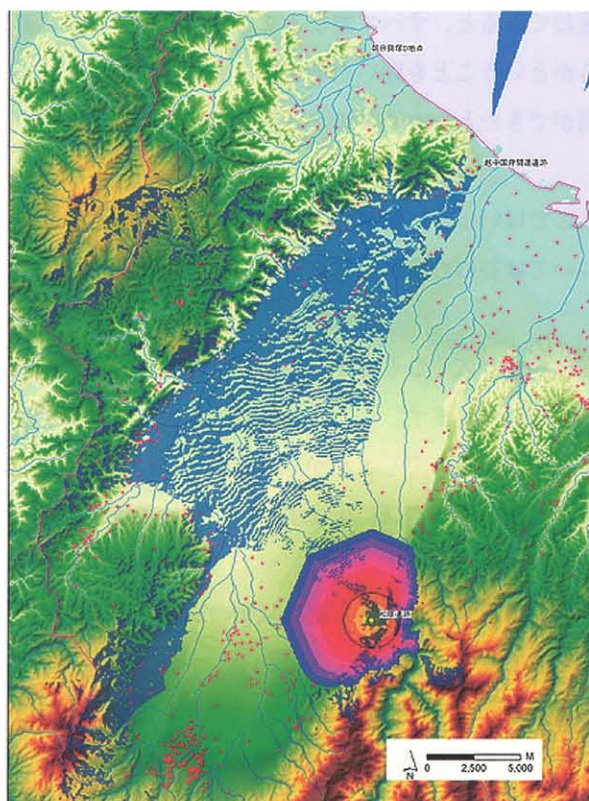
この越中国府関連遺跡は、古代の方からも関心がもたれます。越中国府からは、古代の大手工業生産地帯であった射水丘陵や呉羽丘陵、並びにその間の平野部分が良く見えました。縄文時代とは違いますけれど、私にとっては非常に興味深いことです。それから、海もよく見えます。ただし氷見は1つの独立した空間であり、見ることはできません。越中国守として赴任した大伴家持は、氷見に行かないと氷見が見えなかった



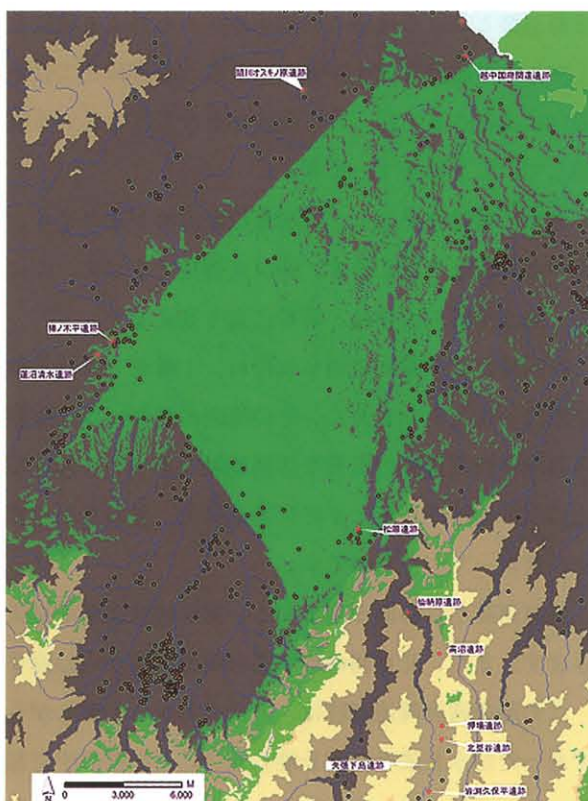
第76図 北豆谷遺跡からの眺望範囲



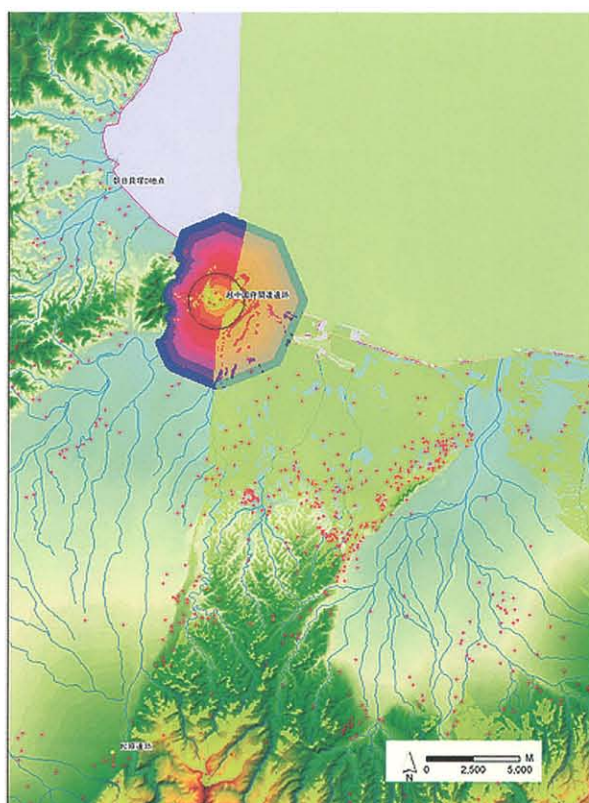
第77図 仙納原遺跡からの眺望範囲



第78図 松原遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲



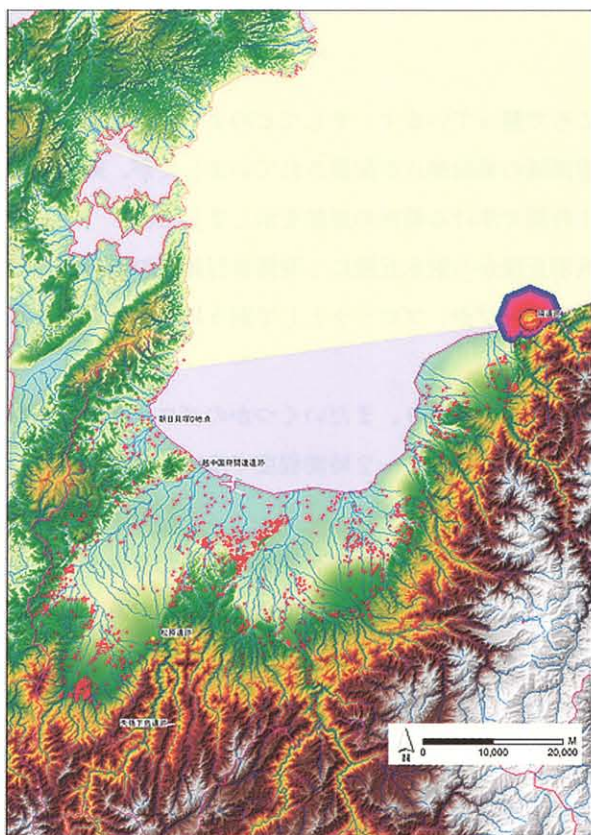
第79図 蓮沼清水遺跡からの眺望範囲



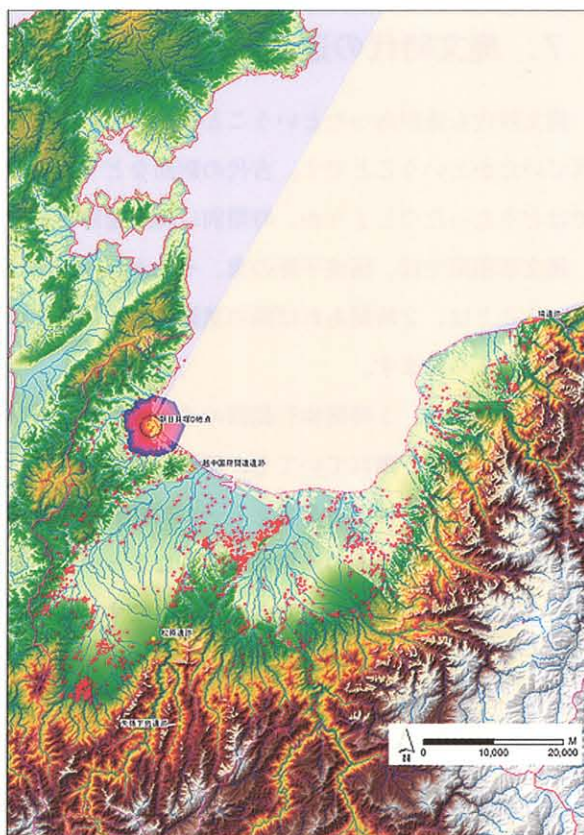
第80図 越中国府関連遺跡からの眺望範囲と
1時間歩行範囲



第81図 縄文遺跡からの眺望範囲の連鎖



第82図 境遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲



第83図 朝日貝塚からの眺望範囲と1時間歩行範囲

のです。

このように矢張下島遺跡を起点とし、その南側・北側にある縄文時代中期・後期の遺跡から見える範囲を重ねていくと、第81図の範囲になります。氷見だけは独立した空間になりますが、砺波平野から蛇紋岩やヒスイの主要な生産地である境A遺跡まで眺望範囲が連鎖します。

それから、1つの遺跡から見える範囲はとても異なっています。海辺の遺跡は海が。平野の遺跡は平野が、山の遺跡は山がよく見えます。これは弥生時代以後では、ちょっと信じられない在り方です。弥生時代以後では一般的に、山の集落や墓地から、山・里・海が広く見えます。それとは違う見える範囲の連鎖の仕組みが、富山の縄文時代にあったと思うのです。

次に、海辺の縄文遺跡は重要ですので、ちょっと考えてみます。第81図は、ヒスイ製装飾具や蛇紋岩製石斧を大量に生産した境A遺跡を始めとする朝日町境遺跡からの眺望範囲と1時間歩行範囲を示したものです。陸地はほとんど見えないのですが、富山湾はほとんどの対岸を、空が晴れていたら見えます。そういう場所に大手工業生産地である境遺跡があったということです。

境遺跡の対岸には、氷見市朝日貝塚という富山県下で一番大きな貝塚遺跡があります。縄文時代前期ころから始まり、沢山の貝類、イルカや魚類を捕っています。ここも陸は余り見えませんが、富山湾は見えます。見えているようにみえる陸地も、ほとんどは旧十二町潟です。朝日貝塚D地点からは、この富山湾が広く見えて境遺跡の付近も良く見えますが、平野部はあまり見えません。これらを含めて連鎖を考えてみます。

7. 縄文時代の道

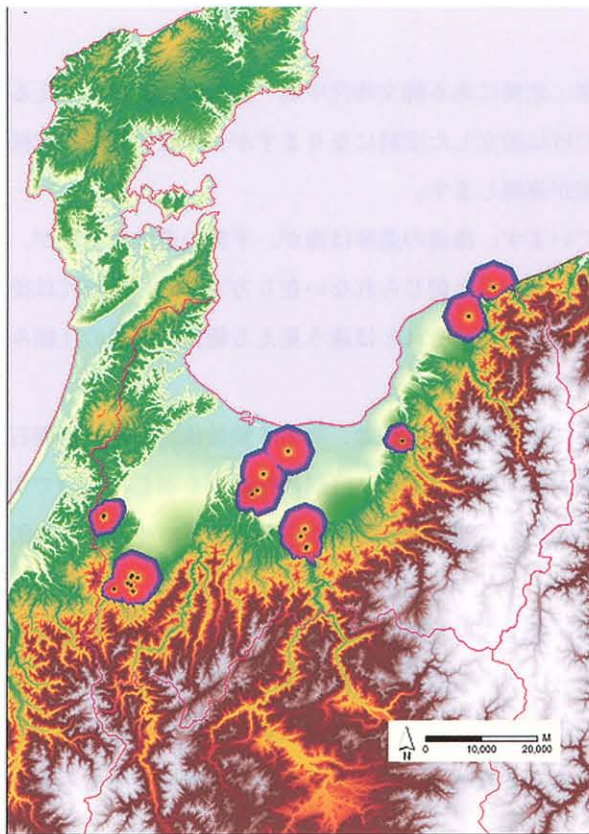
縄文時代も道があったということは、いろいろなところで解っています。そしてどのように行く道が作られていたかということです。古代の駅路などでは、一定間隔の補給拠点が配置されていましたが、縄文時代ではどうだったのでしょうか。時期別に縄文遺跡から、1時間で歩ける範囲の連鎖を示しました。

縄文草創期では、砺波平野の奥、それから小矢部、呉羽丘陵から射水丘陵に1時間歩行範囲の連鎖があるということは、2時間あれば隣の遺跡まで歩けるというグループが、ブロックとして別々にあるということだ、と考えられます。

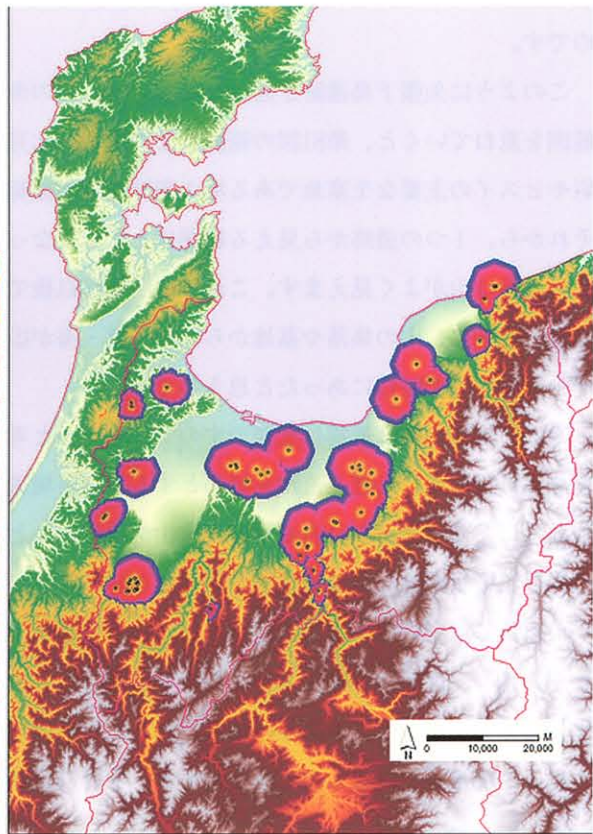
縄文早期では、1時間歩行範囲の連鎖域が広がってきますが、やはり、まだいくつかのブロックに分かれています。距離が離れていても、時間をかけたら行けますが、やはり1～2時間程度で歩ける範囲に隣の集落があるかないかは、道を考える一つの材料になります。

この1時間歩行範囲の連鎖域が広がるということは、いろいろな交易物資を持った人達が歩きやすく、どこへでも行きやすくなったということです。富山県でこのようになるのは縄文時代前期からであり、中期になると1時間歩行範囲がほとんどひとつにつながっています。富山県域へ能登方面から来ても、越後方面から来ても、飛騨方面から来ても、どこかの遺跡にたどり着けば、そこから富山県内のどの縄文遺跡へも行けたでしょう。

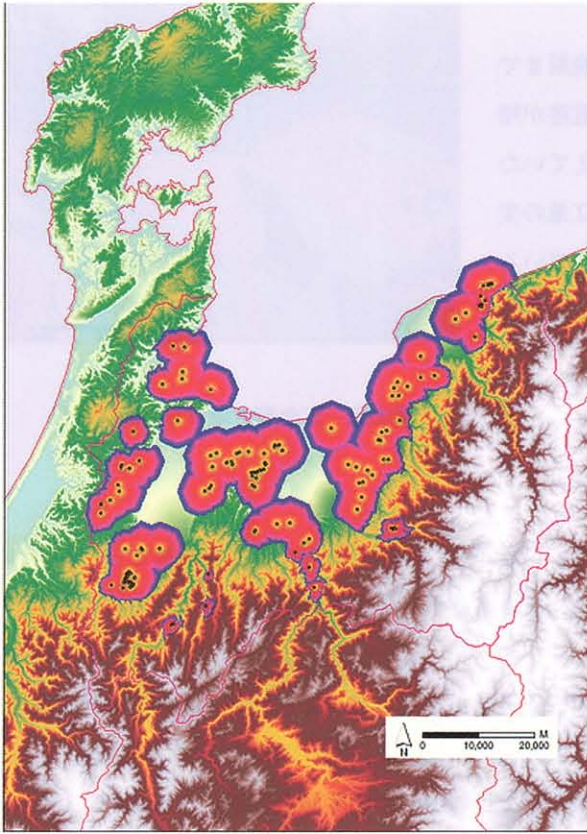
縄文前期から中期にかけては、出土遺物のなかで遠くから運んだものが著しく増加する時代です。どこからどこへ遺物が運ばれるたかということは、どこに集落が立地したかということと表と裏の関係にあったの



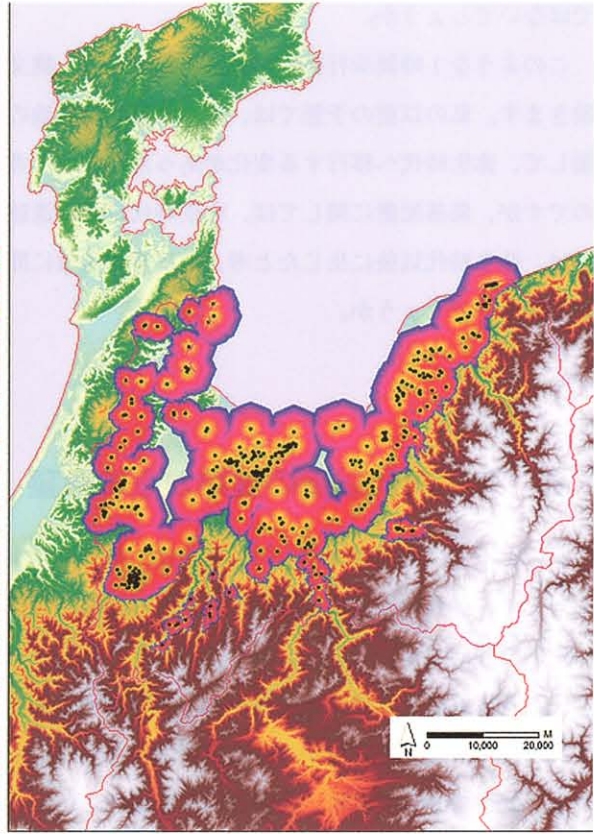
第84図 縄文時代草創期の1時間歩行範囲の連鎖



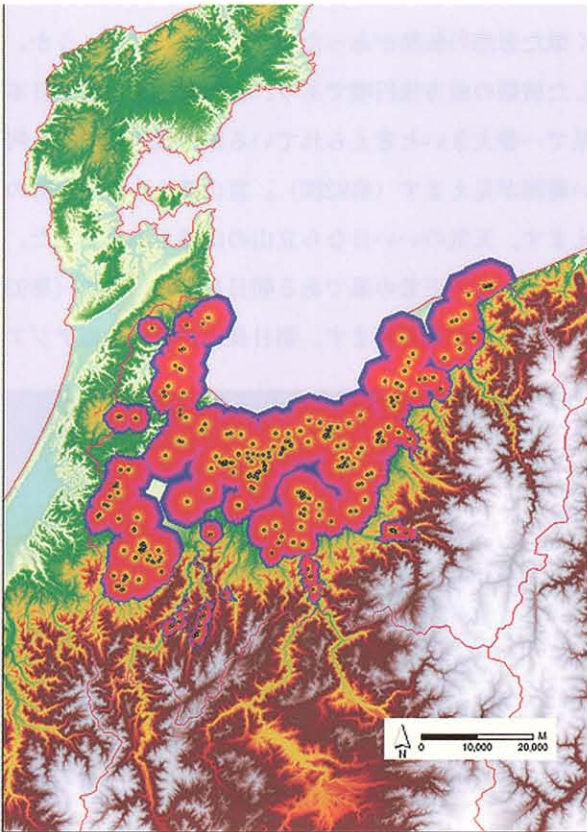
第85図 縄文時代早期の1時間歩行範囲の連鎖



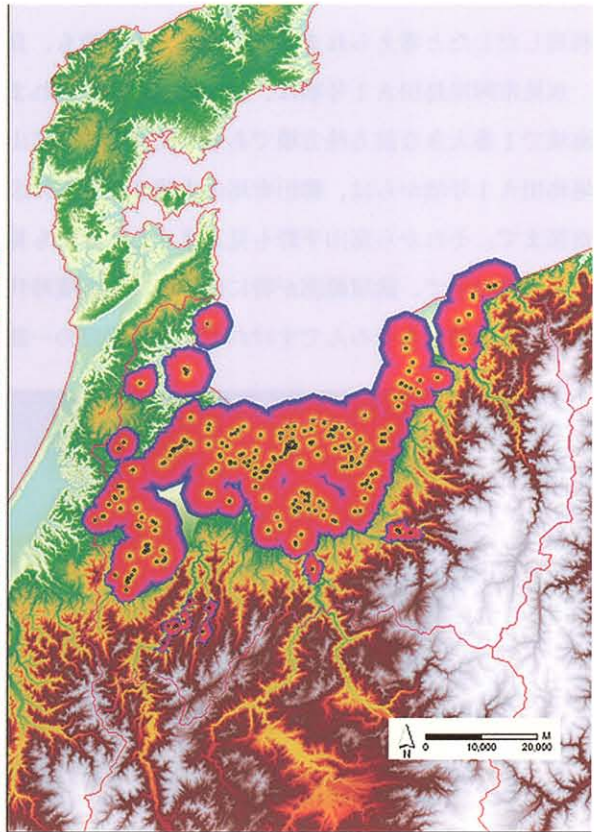
第86図 縄文時代前期の1時間歩行範囲の連鎖



第87図 縄文時代中期の1時間歩行範囲の連鎖



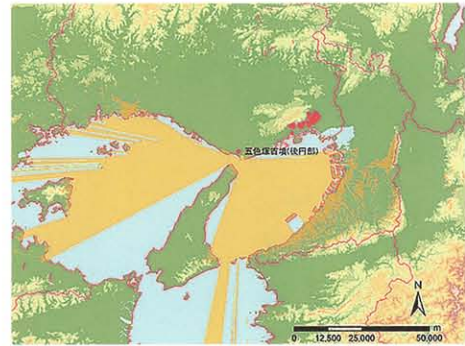
第88図 縄文時代後期の1時間歩行範囲の連鎖



第89図 縄文時代晩期の1時間歩行範囲の連鎖

ではないでしょうか。

このような1時間歩行範囲の連鎖の在り方は、縄文晩期まで続きます。私の以前の予想では、縄文晩期には低地の遺跡が増加して、弥生時代へ移行する変化があったのではと考えていたのですが、集落配置に関しては、弥生時代以後の遺跡立地の変化は、弥生時代以後に生じたと考えるほうが実態に即しているのではないのでしょうか。



第90図 五色塚古墳からの眺望範囲

8. 弥生時代以後の遺跡からの眺望

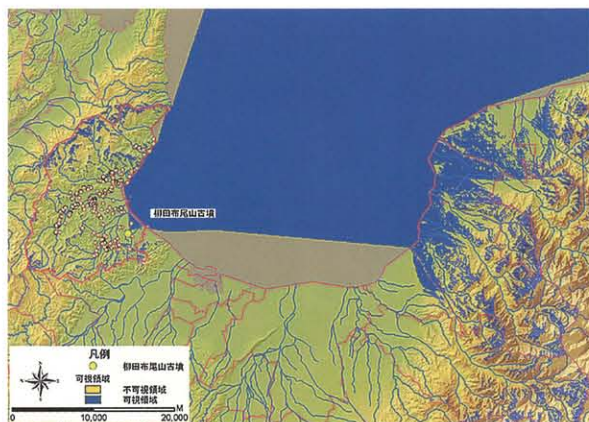
私にとっては縄文遺跡からの見え方は、あまり見なれていなかったものであり、とても新鮮でした。これに対して、弥生時代以後では高いところの遺跡、特に山にある遺跡からは、平野や海が広く見えることが、一般的な傾向です。

先に兵庫県桜ヶ丘銅鐸出土地から、平野部や大阪湾が広く見えたことを述べましたが、4世紀後半に築造された兵庫県五色塚古墳からの眺望範囲はさらに広く、大阪湾から播磨灘にかけて見えます（第90図）。より広く眺望できる場所に、大切な施設を設けるという考え方で世の中が動いていたと考えられます。

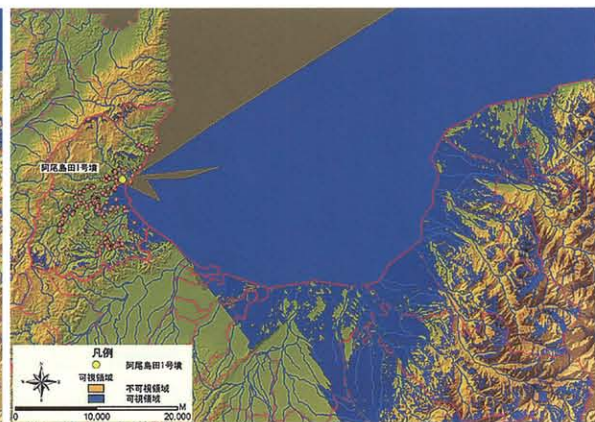
それは、西日本だけではなく、富山県でもそうであったと考えられます。氷見市柳田布尾山古墳は、氷見平野南部から富山湾にかけて広く眺望できる場所にあります（第91図）。この遺跡は、古墳時代に始めてできたものではなくて、この古墳の下には弥生時代の住居跡がありますので、弥生時代から人々はこの場所を利用したと考えられます。近畿地方も北陸も、良く似た思想の転換があったのでは、ないでしょうか。

氷見市阿尾島田A1号墳は、富山大学が調査されました前期の前方後円墳であり、柳田布尾山古墳が日本海域で一番大きな前方後方墳であるのに対して、富山県で一番大きいと考えられている前方後円墳です。阿尾島田A1号墳からは、柳田布尾山古墳よりさらに広い範囲が見えます（第92図）。富山湾から氷見平野の南部まで。それから富山平野も見えますし、立山も見えます。天気の良い日なら立山の山頂もみえました。

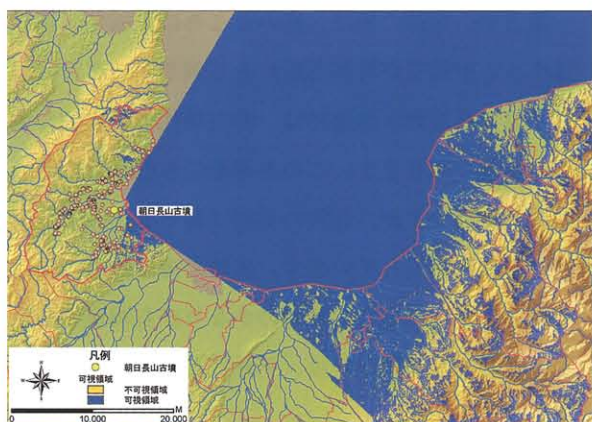
富山県の中で、眺望範囲が特に広いのは、古墳時代後期の、海の王者の墓である朝日長山古墳です（第93図）。富山湾はもちろんですけど、氷見平野の一部、十二町潟が見渡せます。朝日長山古墳は、東アジア



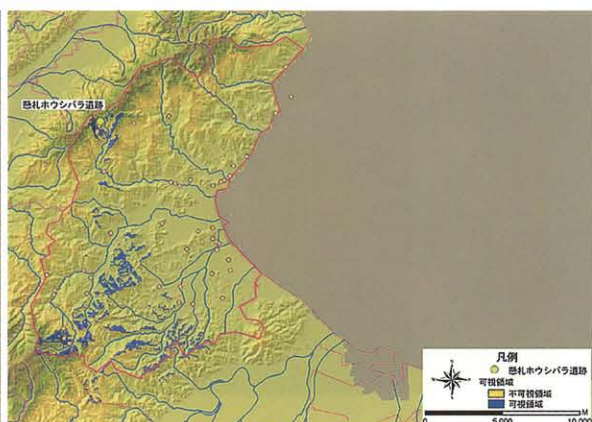
第91図 柳田布尾山古墳からの眺望範囲



第92図 阿尾島田A1号墳からの眺望範囲



第93図 朝日長山古墳からの眺望範囲



第94図 懸札ホウシバラ遺跡からの眺望範囲

の先端的な文物が納められている古墳であり、6世紀段階の日本海の営みにおいて重要な役割を果たした人が葬られていると考えています。

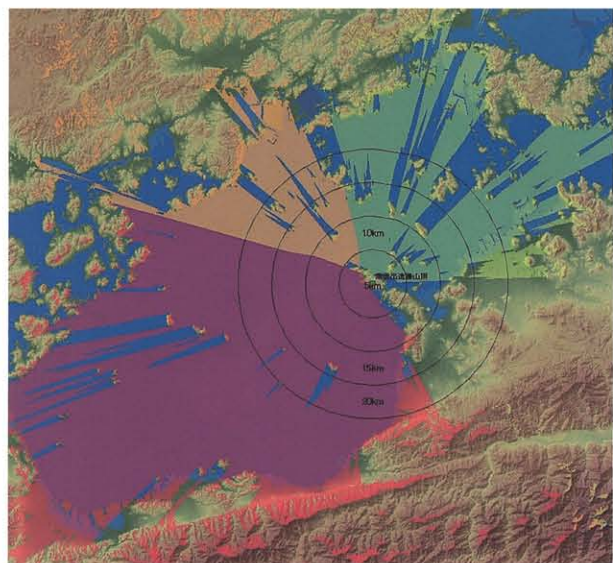
これに対して氷見地域の縄文遺跡の中で一番高い位置にあるものが懸札ホウシバラ遺跡であり、標高は約310mです。ここからは山林は見えますが、海は見えません（第94図）。氷見でも利賀でも、どのような場所に重要施設を置くということについて、縄文時代と弥生時代以後の思想の違いをみるができると思います。

9. 弥生時代の眺望の起源

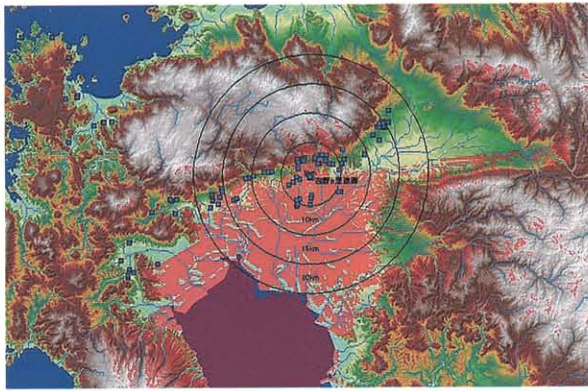
これから弥生時代以後の遺跡からの見え方について少しご説明します。それは明らかに縄文社会の中からではなく、ユーラシア大陸からきた情報に基づいた、重要施設の位置の決め方と考えております。

第95図は、香川県紫雲出山遺跡からの眺望範囲です。この遺跡は大変有名であり、瀬戸内海の交通を監視する砦のような集落ではないかと、古くから考えられています。

弥生時代では、こういう高い所にある遺跡は決して珍しくなく、高地性集落と呼ばれ、軍事拠点や監視拠点と考えられますが、一方で遺物としては通常の生活道具が出土するので、少なくとも装備や食料をすべて与えられた兵士の砦でないことは明らかです。通常の時、通常の生活活動をおこなっているのですが、単なる山村ではなく、非常に大切な社会的な役割が与えられていたものと考えられます。この遺跡では瀬戸内海を一望に見渡せるところに拠点を構えて生活し、自給的な生活をしながら情報収集をするという役割をもったのでしょう。



第95図 紫雲出山遺跡からの眺望範囲



第96図 吉野ヶ里遺跡からの眺望範囲

紫雲出山遺跡の例は、高いところにあつて、規模は小さいが眺望が特異な所にある例です。これに対して佐賀県吉野ヶ里遺跡は、弥生時代の代表的な大型の集落であります。この集落そのものがその地域の政治拠点ですが、丘陵の頂部にあつて、非常に広い眺望範囲をもっています。当時の海岸線は内陸に広がっており、現在の陸地のかなりが有明海でしたが、吉野ヶ里遺跡からは、平野部と有明海がとても良く見えました。

弥生時代は、海の道の支配が大変重要になった時代だと、考えられます。海の道は瀬戸内海・有明海から、

玄界灘の壱岐・対馬、さらに朝鮮半島に連なっています。

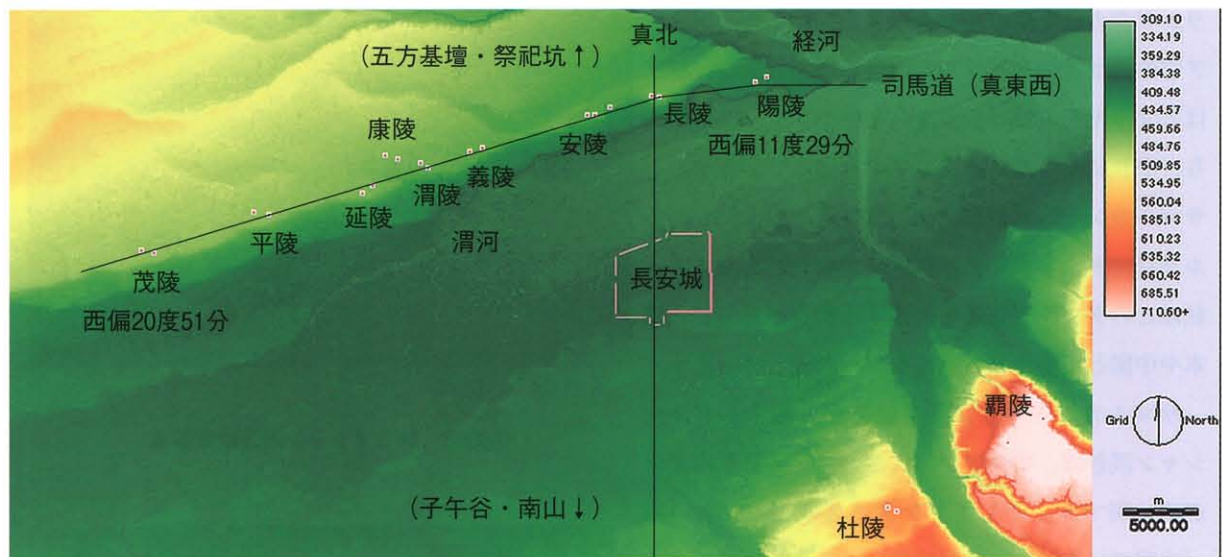
壱岐の原の辻遺跡はまた違ったパターンの眺望範囲をもちます。原の辻遺跡は、壱岐で一番大きな遺跡であり、魏志倭人伝の一大国（壱岐国）と記録した国の王が居住したと考えられます。そして原の辻遺跡に近接した遺跡としてカラカミ遺跡があり、原の辻遺跡に次ぐ大きさです。どちらの遺跡も濠や土塁などに囲まれた防御性の集落です。

吉野ヶ里遺跡と違って、この壱岐の島の一番大きな遺跡である原の辻遺跡からは、平野が見えますが海は見えません。それに対してカラカミ遺跡は、対馬や九州の北岸がかなり良く見える所にあります。壱岐島にはあまり高い山はないのですが、統治拠点としての原の辻遺跡と軍事・監視拠点としてのカラカミ遺跡、という組み合わせであったと思います。

いずれにしてもから海を一望できる高所に拠点を設ける時代の始まりと重なるように、矢張下島遺跡のような山の集落が、消えていったのです。



第97図 ユーラシア大陸のシルクロード・ネットワーク



第98図 漢長安城と皇帝陵

10. 漢帝国の眺望範囲

先程述べたようにこうした弥生時代の遺跡の立地の起源はユーラシア大陸にあります。弥生時代の頃、ユーラシア大陸では交通が発達してシルクロードが開けていきました。このユーラシアでの往来の活発化と、日本列島での海の道の重要化とは、関係があったと考えています。

弥生時代の中でも、弥生時代的な在り方が確立したのは、中国の漢の時代であり、当時の倭国の外交使節を派遣先も漢帝国です。その結果、倭国の記録が中国の史書にいくつか残されています。

漢帝国の首都は長安城ですが、それからその長安城の真直ぐ北へ行った所に、漢帝国を建国した劉邦の陵墓があります。長陵と呼ばれているものですが、前漢時代の皇帝陵は単なる墓地ではなく陵邑という数万～数十万人の人々が居住した都市が付属しています。この長陵・長陵邑の南には、渭水という水運の大動脈があり、その南に長安城があります。そして渭水や長安城を一望の下に見える場所に漢の最重要施設を築いたのです。

中国では春秋時代以前には、大規模な盛土をもつ陵墓を造らなかったのですが、春秋末以後、見晴らしの良い場所に王墓を作ようになり、漢帝国の時代には非常に高度化しました。中国において統一国家を作り始めるときに、交通の要地、首都などがよく見える場所に、象徴的・経済的な施設を建設したのです。こういう情報の基に日本列島の社会も、どこに住まうかということも変化したのではないのでしょうか。

11. シルクロードの都市の眺望

今お話ししましたような事柄が、中国に起源しているのか、あるいはもっと西方からの情報に基づくものなのかという事は非常に難しい、ユーラシア大陸全体の問題であります。

中央アジアのウズベキスタン・サマルカンドには、シルクロードの代表的な都市があります。現在のサマルカンドは15世紀のティムール朝に造られたものですが、それ以前の約2,000年間は元市街の北にあるアフ

ラシアブの丘で都市が営まれました。このアフラシアブの丘はとても見晴らしの良い場所にある、横にはヒマラヤの雪解け水が流れるゼラフシャン川があり、それにそってシルクロードも通っています。サマルカンドの西約150kmの所には、もう一つのシルクロード大都市であるダブシアの丘があります。私はこのダブシア遺跡を調査する機会があって、日本や中国との繋がりを考えながら調査しています。

サマルカンドやダブシア遺跡が立地するゼラフシャン渓谷は、中央アジアにおいて一番農業生産力が高い所です。そしてアケメネス朝ペルシアの頃（中国では春秋末～戦国時代）から、この地域で高い丘の上に拠点を設けて都市を造っています。この都市は広大な眺望範囲をもち、アフラシアブの丘とダブシアの丘からの眺望範囲を重ねると、中央アジア最大の農業生産地帯と、東西交通路を一望できるという場所に造られたことが分かります。

これら中央アジアのシルクロード都市は、ペルシア帝国が拡大する時期に形成されました。だから、広大な眺望範囲を持つ遺跡の登場は、プレ・シルクロード交流という西アジア～中央アジア～中国という情報伝達があった可能性があります。日本列島の縄文時代から弥生時代へかけての遺跡立地の変化は、列島内の特殊な事情で成立したのではなく、ユーラシア大陸全体の動向と関わりながら、生じたことと考えています。

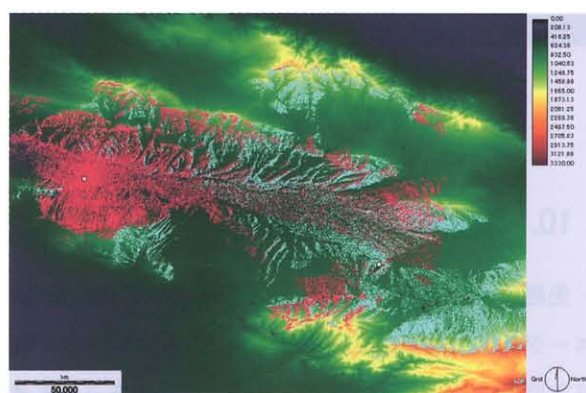
12. インダス文明の眺望

ユーラシア大陸の中で、縄文的な住まい方の例は、私が調査した中では、インダス文明の都市が近いと考えています。インダス文明は縄文時代の中期から後期にかけての頃の文明であり、紀元前2600年頃から最盛期が始まり、紀元前1900年頃から衰退が始まります。インダス文明は、海運や河川を通じての交易網によって栄えた文明とされています。

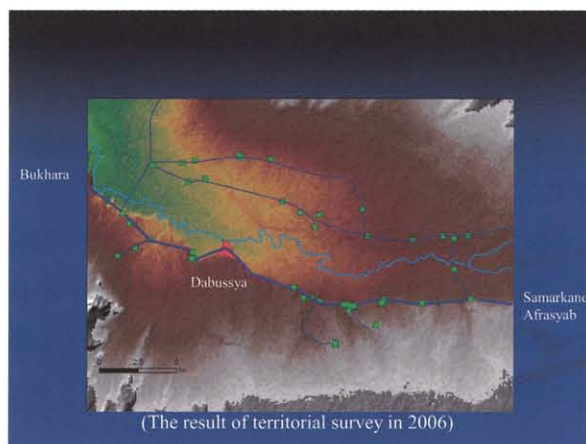
インダス文明の都市文明の最盛期には、インダス川下流域のモヘンジョダロ遺跡のグループ、同上流域のハラッパ遺跡のグループ、それからインドの西北部のグループ、ガンジス川上流域のグループに四大別で



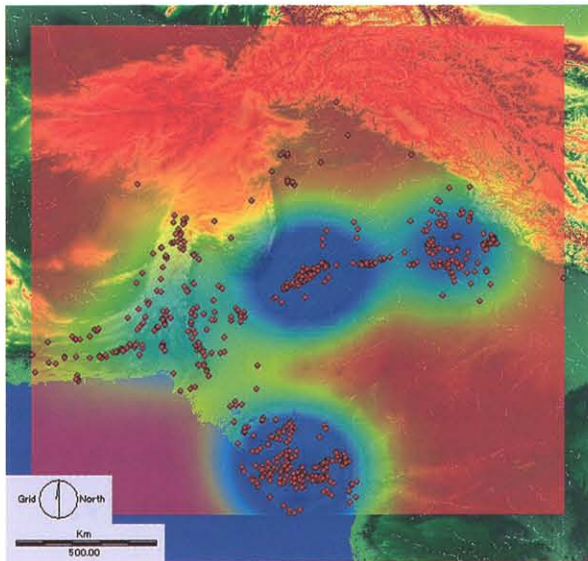
第99図 ゼラフシャン渓谷衛星写真



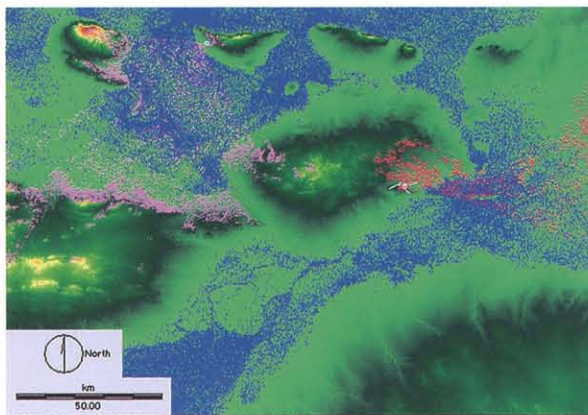
第100図 ゼラフシャン渓谷の眺望範囲



第101図 ゼラフシャン渓谷のシルクロード復元



第102図 インダス文明最盛期の都市分布図



第103図 インダス港町からの眺望範囲

ます。

これらの個々の遺跡は都市として発達していますが、文化的に注目されることは、武器があまり発達していないことです。銅でできたナイフのようなものがありますが、とても人を殺せるような代物ではありません。骨を調べても戦って死んだ人は少ないのです。どの社会でも軋轢はあると思いますが、大規模に戦争した形跡が非常に乏しい文明です。

インダス文明の中心地の1つである北西インドのグジャラートにカーンメール遺跡とドーラビーラ遺跡という2つの遺跡があります。現在は内陸の遺跡ですが、この遺跡が始まる頃は今よりも暖かい時期です。GISを使いまして、海面を3m上昇させると海峡ができます。現在は内陸の都市ですが、当時は港町として栄えていたでしょう。海岸やインダス川の支流を通じて、ハラッパ遺跡ともつながっていたでしょう。

カーンメール遺跡とドーラビーラ遺跡からの眺望範囲はその海峡を望むものですが、先ほどお話しした中央アジアのアケメネス朝ペルシア時代のように広大な眺望領域を持つような遺跡ではどうもないらしいと考えています。それぞれの営みの源泉となる資源の地を主に見ていたと考えます。

これらのインダス文明は、戦争によって栄えた文明ではないことはほぼ確かです。なぜ、そのような文明を作れたかという、都市を中心にして各地の

資源を効率的に開発して交易するシステムがあったから考えるのが一番妥当です。ここに縄文社会の在り方との共通点があると思います。

13. まとめ

以上、利賀村から西アジアまでいたるお話をしました。利賀村において矢張下島遺跡が栄えた時期は、縄文社会が巧みな仕組みを作りあげた段階です。矢張下島遺跡は、この辺りの山林資源を有効に利用する上で特によい場所にあります。しかし、軍事や監視の拠点としては全く適していませんでした。このような場所を優先的に使用したことに、縄文社会の特質があったと考えます。

ユーラシア大陸の社会には、縄文文化やインダス文明に代表されるような、本格的な戦争の痕跡は乏しく、自分たちの周囲の特産物を有効に利用して交易することによって栄えた型と、弥生時代以降の日本列島や、

中国の戦国～秦漢帝国・アケメネス朝ペルシア以後のような遠交近攻で栄えた型の２種類があったと考えています。

どちらもそれなりの文明を作っているのですが、紀元前２千年紀の地球規模の寒冷期などを経てユーラシア大陸の文明の性質が大きく変化していったと思います。日本でも縄文社会から弥生社会へかけて多くの社会的変化がありました。

矢張下島遺跡から未来を考えるという課題がもし与えられたなら、我々は人類の歴史から二つの文明の知恵を教えられているのであり、未来に発展させていくべきものは何か、と考えたいと思います。そのため、縄文やシルクロード以前の文明の知恵を知ることが、未来へ向けても少なからぬ役割を果たすと思います。

私は、矢張下島遺跡を見せていただいて、大変感動しました。感動するだけでは申し訳なくて、それを少しでも人類史に結びつけたいと思いで、中央アジアからインダス文明までたどりつきました。そのうちにヨーロッパまで行き、また新大陸の文明とも比較して、日本列島の歴史を考えたいと思っております。

参考文献

宇野隆夫編著 2006『実践 考古学GIS』 NTT出版

宇野隆夫編 2006『世界の歴史空間を読む－GISを用いた文化・文明研究－』 国際日本文化研究センター

(平成18年11月4日「第3回 利賀村の歴史と風土を考える会 やまびとの生活 －過去から未来へ－」 基調講演 於複合教育施設アーパス)